香美町「ふるさと教育」20 年の振り返り調査 報告書

～定量・定性調査からみる原体験の長期的効果と今後の展望～

1. はじめに

香美町において「ふるさと教育」の推進が平成 17 年に開始されてから今年で 22 年目を迎え、交流会として共有する場を持ち始めてから 20 年という大きな節目の年を迎えました。本調査は、児童・生徒だった頃に本町のふるさと教育を経験し、現在 25 歳から 34 歳の成人となった当事者世代を対象に、当時の教育経験が現在の価値観、地域への愛着、ならびに生活意識にどのような影響を与えているかを定量的・定性的な両面から総合的に検証・分析したものです。

Web アンケート調査（N=86）による定量分析では、当時の活動に対して「意味があった」と感じていた割合が 7 割を超え、成人後の現在においても過半数（51.8%）が「現在の価値観に影響している」、約 71%が「地域に愛着を持っている」と回答しました。注目すべき点として、進学や就職によって一度町外での生活を経験した層ほど、将来的な地域との関わり意向が顕著に高い（就職経験層：75.0%、進学経験層：54.2%）という実態が判明しました。

この定量傾向の背景を掘り下げるべく実施したグループインタビュー調査（N=4）からは、子ども時代の自然体験や地域住民との触れ合いという「原体験」が、都市部での多忙や環境変化に直面した際の心理的拠点（「安心感・リセットできる場所」）として機能し、大人になってから地元の価値を再認識する契機となっている実態が浮き彫りとなりました。

本報告書は、これら 2 つの調査成果を接続し、20 年間の「ふるさと教育」が育んだ心理的プロセスと施策上の示唆を取りまとめ、今後の地域教育の持続的推進に向けた基礎資料とするものです。

2.調査概要

項　目	Ⅰ. アンケート調査（定量調査）	Ⅱ. インタビュー調査（定性調査）
調査目的	ふるさと教育経験者の意識・評価の全体傾向および属性別関係性の計量的把握	アンケート結果の定性的背景（具体的エピソード・心理的プロセス）の深掘り
調査主体	香美町教育委員会	
分析・監修協力	兵庫県立大学 環境人間学部 教授 尾﨑公子	

項　目	Ⅰ.アンケート調査(定量調査)	Ⅱ.インタビュー調査(定性調査)
調査対象	香美町住民基本台帳に基づき、平成４年４月２日～平成 13 年４月１日生まれの町内在住者へ発送(全数調査)。 ※転入者等を含むため、実際の「ふるさと教育」経験者数は不詳。	小学校時代に香美町で「ふるさと教育」を経験した現在 25 歳～34 歳の成人
対象人数・構成	有効回答数 86 名 (男性 38 名、女性 45 名、無回答３名 / 平均年齢 29.7 歳)	４名 (女性２名、男性２名 / 25 歳～34 歳)
実施手法・形式	郵送案内状配布・専用 Web フォーム回答方式(※1)	オンライン座談会形式 (グループインタビュー / 約 60 分)
回収結果	【発送数】698件 【宛先不明返送数】0件 【有効発送数】698件 【有効回答数】86件 【有効回収率】12. 3パーセント ※発送数中の経験者数が不詳のため、経験者中の回収率は不詳	－ (対象者直接リクルートによる座談会実施のため設定なし)
実施時期	2026 年７月 15 日 ～ 2026 年８月 31 日	2026 年９月９日(水) 19:00～20:00
立ち合い・進行	－	進行:尾﨑公子教授 / 陪席:香美町教育委員会(２名)
主な調査内容	・属性(年齢、性別、就業、町外居住経験) ・当時の教育評価(意味感、活動内容) ・現在の地域意識(愛着、価値観影響、関わり意向) ・自由記述(思い出、ふるさとの意味、改善点)	・「ふるさと」が与える精神的意味(安心感・リセット等) ・記憶の想起トリガー(季節、人生の転機) ・都市生活と地元の対比・意識変化 ・次世代教育・持続可能性への意見

※1:郵送による案内状送付・専用 Web フォーム回答方式を採用。



3. ふるさと教育 20 年の振り返りアンケート 集計結果

これまで香美町で進めてきた「ふるさと教育」の 20 年間を振り返り、当時教育を受けた皆様が大人になった現在の意識や地域への思いを調査・分析したアンケート集計結果です。

(1)全体傾向(基本集計、有効回答数 N=86)

①回答者の全体像(属性分布)

- **年齢構成:** 25 歳～34 歳(平均約 29.7 歳)。29 歳(17 名・19.8%)、32 歳(14 名・16.3%)。
- **性別:** 女性 52.3%(45 名)、男性 44.2%(38 名)、無回答 3.5%(3 名)。
- **町外居住経験:**
  - 進学で町外に出た経験あり:55.8%(48 名)
  - 就職で町外に出た経験あり:18.6%(16 名)
  - ずっと町内(町外経験なし):16.3%(14 名)

町外居住経験率
83.7%
(回答者 86 名中 72 名)

- **就業状況:** 会社員(29.1%)、公務員(25.6%)、専門職(14.0%)が中心。

② 当時の「ふるさと教育」の評価

当時の活動について「意味があった」と感じていた割合は 7 割を超えており、教育プログラムそのものに対する全体評価も肯定的な層(60.0%)が過半数を占めています。

評価項目	肯定的な評価 (とても＋ある程度)	中立 (どちらともいえない)	否定的な評価 (あまり＋まったく)
意味感(当時)(Q1-2)	72.9% (62 名)	17.6% (15 名)	9.4% (8 名)
プログラム全体の評価 (5-1)	60.0% (51 名)	32.9% (28 名)	7.1% (6 名)

③現在(成人後)の価値観・地域意識

1. **価値観への定着:** 過半数(51.8%)が教育経験を「現在の自分の価値観に影響している」と捉えており、一過性の体験にとどまらない長期的な学習効果が確認できます。
2. **高い地域愛着と関わり意向:** 成人後の現在においても、約 71%が地域に愛着を持ち、約 56%が今後も地域と関わりたいと考えており、ふるさと教育の基盤となるマインドが醸成されています。
3. **記憶の風化と人間関係の接続:** 日常的に「思い出す頻度(33.7%)」や「地域の人とのつながり感(46.5%)」は、愛着度合いに比べるとやや低めにとどまっています。大人になってからの関係性をどう維持・再構築するかが、今後の「関わり意向」を具体化するための課題です。

意識・変化項目	肯定的な意識 （とても＋ある程度）	中立 （どちらともいえない）	否定的な意識 （あまり＋まったく）
地域への愛着（Q4-1）	70.9%（61 名）	15.1%（13 名）	14.0%（12 名）
今後の地域関わり意向（Q4-3）	55.8%（48 名）	30.2%（26 名）	14.0%（12 名）
現在の価値観への影響（Q2-1）	51.8%（44 名）	23.5%（20 名）	24.7%（21 名）
地域の人々とのつながり（Q4-2）	46.5%（40 名）	23.3%（20 名）	30.2%（26 名）
日常生活で思い出す頻度（Q3-1）	33.7%（29 名）	17.4%（15 名）	48.8%（42 名）

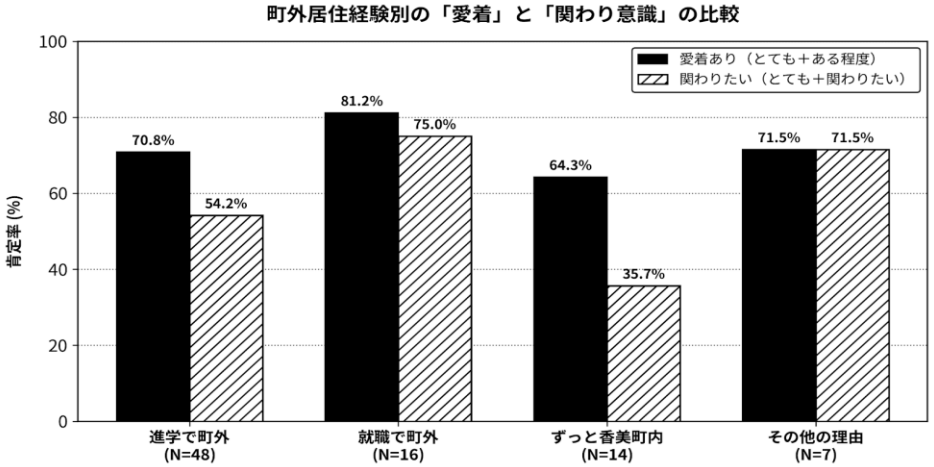
（2）クロス集計 当時の教育満足度と大人になってからの地域愛着・関わり意向の関係

①【町外生活経験】×【愛着・関わり意向】

町外（進学・就職等）での生活経験が、地域の愛着や将来の関わり意向にどのように影響しているか？

→「ずっと町内に住んでいる層（35.7%）」よりも、「就職で外に出た層（75.0%）」や「進学で外に出た層（54.2%）」の方が今後の地域関わり意向が顕著に高い結果となりました。一度外に出たことで地域の価値を再認識している傾向がうかがえます。

町外居住経験（Q0-3）	人数（N）	愛着あり（肯定率） （とても＋ある程度）	関わりたい（肯定率） （とても＋関わりたい）
進学で町外に住んだことがある	48 人	70.8%	54.2%
就職で町外に住んだことがある	16 人	81.2%	75.0%
ずっと香美町内（町外経験なし）	14 人	64.3%	35.7%
その他の理由	7 人	71.5%	71.5%

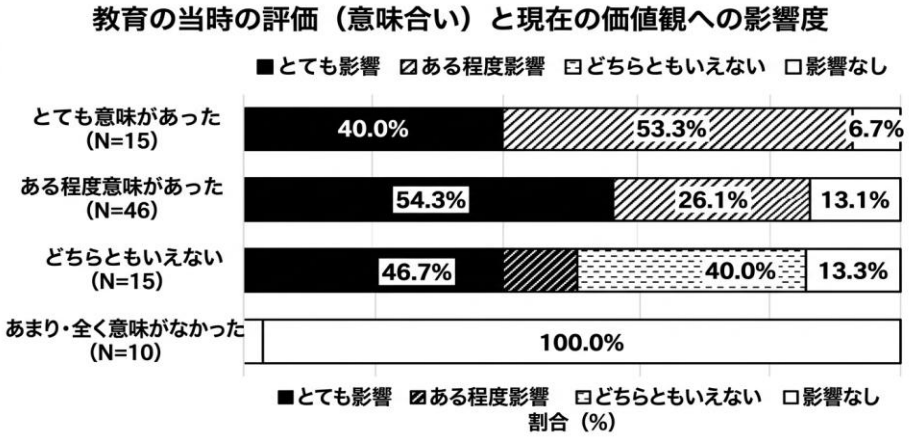


②【当時の教育評価】×【現在の価値観への影響】

当時のふるさと教育に対する主観的評価（意味があったか）と、大人になった現在の価値観への影響

→ 当時「とても意味があった」と感じていた層は、実に 93.3%が現在の価値観に影響していると回答。教育経験の質・実感が、成人後の価値観形成に直結しています。

当時の評価（Q1-2） 教育に「意味があったか」	サンプル数 （N）	現在の価値に とても影響	ある程度影響	どちらとも いえない	影響なし
とても意味があった	15 人	40.0%	53.3%	0.0%	6.7%
ある程度意味があった	46 人	6.5%	54.3%	26.1%	13.1%
どちらともいえない	15 人	0.0%	13.3%	46.7%	40.0%
あまり・全く意味がなかった	10 人	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%



③【価値観への影響】×【今後の地域関わり意向】

ふるさと教育によって価値観が形成されたと感じている人ほど、将来的に地域と関わりたいと考えているか？

→ 価値観に好影響を与えられた層（肯定層）の関わり意向は極めて高く、特に「とても影響している」層では100%が将来的な関わりを希望しています。

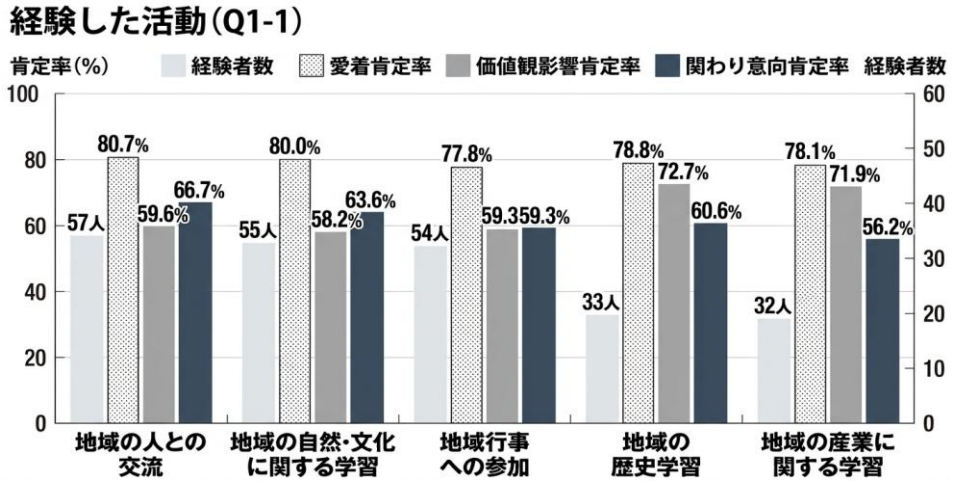
価値観への影響 （Q2-1）	人数 （N）	関わり意向（肯定率） （とても関わりたい＋関わりたい）	どちらともい えない	関わりたいと 思わない
とても影響	9 人	100.0%（うち「とても」が 66.7%）	0.0%	0.0%
ある程度影響	35 人	68.6%	31.4%	0.0%
どちらともいえない	20 人	55.0%	35.0%	10.0%
あまり・全く影響なし	21 人	9.5%	38.1%	52.4%

④【経験した活動内容】×【意識変化・意向】

経験した活動プログラムごとの「愛着」「価値観への影響」「関わり意向」の肯定率比較(※複数選択可の設問)

→「地域の人との交流」や「自然・文化学習」を体験した層は、成人後の関わり意向が高く、「歴史学習」や「産業学習」を体験した層は、成人後の価値観への影響を感じている割合が 7 割超と高くなっています。

経験した活動 (Q1-1)	経験者数	愛着肯定率	価値観影響肯定率	関わり意向肯定率
地域の人との交流	57 人	80.7%	59.6%	66.7%
地域の自然・文化に関する学習	55 人	80.0%	58.2%	63.6%
地域行事への参加	54 人	77.8%	59.3%	59.3%
地域の歴史学習	33 人	78.8%	72.7%	60.6%
地域の産業に関する学習	32 人	78.1%	71.9%	56.2%



(3)自由記述 提供結果の背景にある感情や具体的エピソード

定量データで判明した「高い愛着」や「将来の関わり意向」が、具体的にどのような体験や思いによって支えられているのか、主に 4 つのテーマに整理できます。

設問別の回答量

設 問	内 容	件 数
Q3-2	思い出す場面	18
Q5-2	良かった点	21
Q5-3	改善・不足	13
Q6-2	香美町とは	27
Q6-3	誇り・魅力	30
総合	総合自由記述	15

① 感情の質：「ふるさと」が持つ精神的意味

Q6-2「あなたにとって『ふるさと』とはどのような存在ですか」の自由記述では、単なる地理的場所を超えた深い精神的意味合いが語られています。

- **「安心感・リセットできる場所」としての感情：**
  「落ち着ける場所」「深呼吸がしやすく力が抜ける場所」「精神の柱」
  「都会と違って人も少なく、周りの目を気にせずのんびり過ごせる場所」
- **「守り・受け入れる場所」としての意識：**
  「誰かにとっての帰る場所。今の私にとっては、その誰かがいつでも帰ってこれるように守る場所」

② 記憶の起動トリガー：日常生活でふるさと教育を思い出す場面

Q3-2「どんな場面で思い出すか」では、日常のふとした瞬間に当時の記憶が蘇っている様子が語れています。

- **具体的な体験の記憶：**
  「田植え」「山に登ったこと」「近所のおじいちゃんに教わった昔の村の小唄」
  「祭りの神輿が通った時」「学習やイベントで行った場所を通りかかった時」
- **都市部とのギャップを感じた時：**
  「都市部に出かけた時に『やっぱり田舎の方がええな』と思う時」
  「町外に出て、自然に恵まれていて災害が少ないことの有難みを感じた時」
- **ライフステージの変化（子育て・同窓会）：**
  「自分の子どもの教育について考えるとき」「同級生と学生時代の昔話をするとき」

③「ふるさと教育」がもたらした長期的な効果

Q5-2（良かった点）や Q6-1（地域・学校へのメッセージ）からは、体験が単なる思い出にとどまらず、大人の価値観や選択にどのように結びついているかのストーリーが見えてきます。

- **五感を通じた「体験型学習」の価値：**
  「聞いて知識として蓄えるだけではなく、実際に経験して本質を知ることができた」
  「地域の色んな方との交流により、探究心やコミュニケーション能力が鍛えられた」
- **U ターン（地元回帰）を決めた理由：**
  「山に登り、自然で遊び、米や野菜を作った。田舎は何もないと言う人もいるが、大自然と人とおいしいごはんがある環境を楽しめている。そう思えるヒントをふるさと教育でもらっていたのかもしれない」（U ターン回答者）

④今後に向けた課題と現場へのメッセージ

Q5-3（改善点）や Q6-1（メッセージ）では、定量的には測りにくい実体験ならではの課題や切実な要望が示されています。課題・将来不安は 9 件ですが、平均 157 文字（その他 26 文字）で、頻度以上に具体的・長文です。

- **大人の姿勢・メッセージ性への課題：**

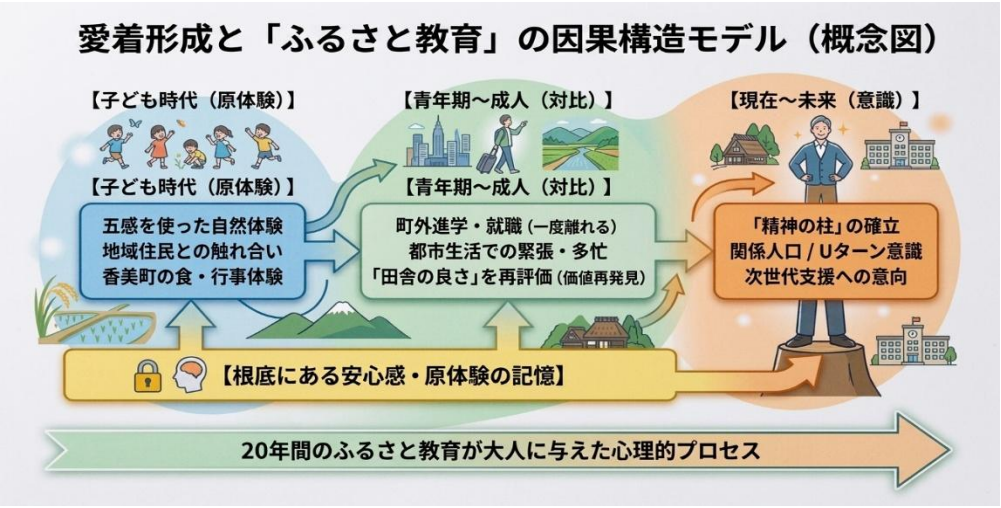
「ふるさと教育を進めると言いながら、周りの大人が『こんな田舎』『こんなところ』と卑下する発言をしていたこと」

＊子どもに愛着を持たせる以前に、大人が地域を肯定的に捉えて伝える重要性が指摘されています。

- **「ふるさと教育」という認知の弱さ：**
  「当時はどれが『ふるさと教育』だったのか分からず、後から知った」「記憶に残っていない」
  ＊体験自体は楽しかったものの、それが「教育プログラム」として意識化・言語化されていなかったケースも散見されます。
- **次世代へのエールと地域維持の願い：**
  「子どもが少ないと嘆くのではなく、今ここに暮らしている子どもたちの姿を前向きに見守ってほしい」
  「条件不利地での児童数減少は致し方ない部分もあるが、自然の美しさや人の温かさなど、20 年前と変わらない香美町の素晴らしさを子どもたちに教えてあげてほしい」

（4）質的知見のまとめ（定量結果との接続）

定量分析で判明した「一度町外へ出た就職・進学層ほど関わり意向が高い」という傾向の背景には、**「子ども時代の自然・文化体験や地域の人とのふれあいが、都市部生活における心理的対比（価値の再発見）の軸になっている」**というストーリーが存在することが、自由記述の定性データから裏付けられます。



4. ふるさと教育振り返りインタビュー調査報告書

(1)調査の背景と目的

香美町の「ふるさと教育」20 年間を検証するため、アンケート集計(定量調査)に加え、当事者世代へのインタビューによる「生の声」(定性調査)の収集を行いました。アンケートの自由記述分析からは、「ふるさと」の精神的意味と記憶のトリガーとして以下の要素が抽出されています。

精神的拠点:「安心感・リセットできる場所」「次世代へつなぐ環境への期待」
想起トリガー:自然体験(田植え・山登り等)、都市での多忙・子育て・同窓会等の人生の節目

本報告では、当事者の語りからこれらの要素をより深く分析・考察し、数値データだけでは見えにくい「子ども時代の原体験がもたらすリアルな影響」と「今後の展望・課題」を明らかにします。

(2)「ふるさと」が与える精神的拠点

ふるさと教育による原体験は、大人になり都市部や社会で多忙・環境変化に直面した際、自己を支える心理的基盤となっています。

①「安心感・リセットできる場所」

都市生活での多忙やストレス、予期せぬ環境変化に直面した際、地元の「自然」や「顔の見える関係性」が安心感とリセットの場を与えています。

> 「個人的には『落ち着く』、もうそれだけなんですよ。知り合いがいる感覚が安心感に繋がっているかなと思います。神戸に住んでいたときは、知ってる人がいない 1 人って感覚で、孤独感がすごかった。ここにいる理由は『落ち着く』なんで、ずっと心穏やかに過ごせる場所であってありがたいです。」
>
> 「大阪におって一番大変な時、仕事や人間関係で誰にも相談できなくて。親が気づいて避難というか帰ったんですけど、本当に人がいなくてトンボがいて、すごく元気になれた。心の健康でここまで来たって感じですね。」
>
> 「(外国で暮らしていたが)食べ物が合わずストレスで、都会はすごくせかせかしてて。振り返ったら香美町はお年寄りが横断歩道で見守ってくれたり……日本に帰ってくるなら香美町だろうと。」
>
> 「都会で仕事をして体調を壊し帰ってきた。ここは夜に暗いのがいい。周りは畑や山で星が良く見え、パトカーの音もしなくてとても静か。」

②「次世代へつなぐ環境への期待・持続への視点」

地域で温かく育てられた記憶を持つ体験者は、自身が受けた体験を肯定的に捉えており、地域や教育の取り組みが無理のない形で将来も維持・継続されていくことを望んでいます。

> 「僕が受けてきたふるさと教育はすごくいいものだと思うので、全員があまり無理をせず、続けられる範囲で今後もやっていくことが大事かなと思います。」
>
> 「20 年後に帰ってきた人が関わり続けたいと思える香美町であってほしい。知らない人でも挨拶できちゃうような、こういう環境自体が良いのかなと思います。」

(3)記憶の起動(想起)トリガー

参加者の原体験は、季節の巡りや人生の転機によって鮮明に蘇り、地域との繋がりを再認識させています。

① 自然体験(五感を通じた原体験)

田植えや自然学校など「五感(泥の感触や景色)」を伴う体験は、季節が巡るたびに思い出されています。

> 「おじいさん・おばあさんと泥の感触を感じながらやった田植えや稲刈りは楽しかった。自然学校など節々に思い出すことがあるので、そういう体験は続けてほしいです。」
>
> 「兎和野高原での自然学校は親元を離れた初めての外泊で印象深いです。春は田植え、夏は川遊び、秋は稲刈り、冬はスキーと、季節が巡っても思い出すタイミングがあります。」
>
> 「自然学校での地引網や魚の放流、スキー教室など、地域資源を生かした体験は子供たちの記憶に残ると思います。」
>
> 「自然学校でテント泊をしたり、皆でカレーを作ったりした。」

② 都市での多忙・子育て・人間関係の節目

都市部での生活や孤独感、自身の子育てなどの節目が対比・きっかけとなり、地元の有難みが再認識されています。

> 「大阪で駅前がコロナで閉鎖された一番大変な時、人にも会えず仕事や人間関係でいろいろあって帰ろうかと思った。」
>
> 「神戸にいた時は知っている人がおらず便利だけど孤独感を味わった。今は 2 歳半の子どもがいて、散歩するときによくおばあちゃんと話したりします。」
>
> 「都市部はすごくせかせかしていて、隣や近所の人も全然知らない。香美町との違いを感じました。」

(4)考察:定性データの位置づけと「因果構造モデル」への接続

定量調査で示された「一度町外へ出た層ほど、成人後の地域関わり意向が高い」という傾向の背景には、座談会の語りから以下の心理的プロセスが存在することが確認できます。

ステップ	心理的プロセス	語られた具体的な内容
1. 原体験の蓄積	地域での学び・体験	子ども時代の「自然体験」や「地域住民との触れ合い」が安心感の土台となる。
2. 対比と想起	都市生活での転機	町外での多忙や孤独に直面した際、原体験が「心の安全基地(リセットできる場所)」として想起・再評価される。
3. 意識の醸成	地域関わり意向	地域への感謝や肯定感が、将来的な関わりへの期待や、次世代へ環境を残したい意識へと変化する。